

当事者の立場から物事を考えて、相談を受けていきたい

北海道子どもセンター相談員
(元小学校教諭〈特別支援学級〉) 原田 勇



私のふる里はどこなのか、と時々考えるのですが、私は旧国鉄（現JR北海道）深名線の朱鞠内に生まれ、その朱鞠内周辺で小学校の大半を過ごしました。朱鞠内湖はご存知のとおり戦時中日本人のタコ部屋労働と朝鮮人・中国人に対する強制連行・労働によって造られた人造湖です。現在までに既に200名以上の犠牲者が判明しています。

その環境で育ったせいか、小学校教員になってから現在までの30年以上「民衆史掘りおこし運動」をささやかながら続けています。元教育大学長の故船山謙二氏は、「掘り起こし運動は文字通り歴史運動ですが、同時に民衆の自己形成運動＝教育運動だと考えています」と指摘しています。

私は定年退職を迎えるにあたって、自分は退職後何をしようかなと考え、結果、遅まきながら自己形成と教育関係で少しは役立つことをやりたいと大学院（北大教育学部）に進みました。大学院では教育臨床心理学を学び、修了後、土井さん（北海道子どもセンター事務局長）に声をかけられ教育相談員になりました。（昨年からは、教育大札幌校で非常勤講師も勤めています）

—最近思うこと—

今、子どもたちは多くの問題に直面させられ、苦

悩む葛藤し解決策を模索しています。電話相談を受けてもそのことがひしひしと伝わってきます。

臨床教育学を提唱している田中孝彦氏は、精神科医ジュディス・L・ハーマンの『心的外傷と回復』を取り上げて、この本は「傷ついた人々を支える援助的実践の模索に基づいて、人間の生存・発達を支える援助の原則を提示したものの一つと受けとめてきました」と述べ、およそ次のように説いています。「『心的外傷』を負った人々は、『無力感』に支配され、周囲の人々から理解されおらず孤立していると感じて『孤立無援』にさいなまれながら、少しでも自分を受けとめてくれるような他者を求め、他者に『しがみつく』場合がしばしばあります。しかし、その『無力感』『孤立無援』を同じ重さで受けとめきれぬ他者はめったにいないので、『傷』を負った人々は期待を裏切られて、しがみつこうとした相手を『攻撃』してしまうことがしばしばあります。そして、『しがみつく』と『攻撃』の頻繁で複雑な交替を繰り返すことが多い。（略）それは、今の日本の子どもたちに見られるさまざまな不安定な姿、『攻撃』と『依存』とを複雑に交替させる姿を説明しているように読めます」

大変意味深い言葉だと思います。私は以上のことを頭に入れながら、当事者の立場からものごとを考えて、これからも電話相談を受けていきたいと考えています。

どうぞよろしく願いいたします。

困ったときには “少し気が楽になるかも…” と電話をかけて下さい

北海道子どもセンター相談員
(元小学校教諭) 那須野 郁子



るんだと目を開かせられた思いでした。現職中は、相談活動のことを詳しくは知らなかったのです!!

相談内容は多岐にわたりますが、少しずつ慣れてきました。最近、誰にも相談できずに電話帳で探してかけてくる人が多いです。そんなとき、相談活動の存在意義を実感します。また、相談員や他の機関との連携プレーで難題が解決したときなどは、ほっとすると同時に「子どもセンター」の底力を感じ、私自身が励まされる思いになります。

困ったときには
“少し気が楽になるかも…”
“何かヒントが見つかるかも…”

そんな思いで電話をかけてみてください。

お体をご自愛の上活動してください！

元 北海道子どもセンター事務局長

大口 久克

思い起こせば、土井先生との初めての出会いは、2002年の夏、「日本作文の会の全国集会と道民教集会の共同開催」がライフポートで行われたときのことでした。土井先生は受付のところにいたと思うのですが、氏名を記入していた私に、「あなたが大口先生ですか。子どもセンターの土井です」と、優しく声をかけていただいたのを今でも覚えています。

子どもセンターの役割を学んだ

北海道子どもセンターの業務内容について、その後詳細にわたって理解することになるのですが、当時の私の理解はそれほどでもなく、「子どもセンター」という響きにすぐに反応できなく失礼をしたのではないかと思います。

3年後の2005年から5年間、札幌での仕事となり、「北海道子どもセンター」と深く関わることになりました。「北海道子どもセンター」の仕事がどのようなものであるのかを具体的な業務を示すことで教えてくれたのは、相談員でもあり、事務局長でもある土井先生でした。

当時、子どもセンターは北8条東1丁目(札幌)の富士見屋ハイツの8Fにありました。そのフロアで、子どもセンターの相談員と私たちで、根室の銘酒「北の勝」を囲みながら和やかに新年会をおこなったのも懐かしい思い出です。

少年と妹が公衆電話から

それから間もなく子どもセンターが移転してきたため、相談業務の様子が手に取るようにわかるようになりました。ある年の冬ですが、公衆電話から子どもセンターに電話をかけてきた少年と妹が事務所を訪れ、児童相談所の職員や中学校の先生も事情を聞きに来たこともありました。

子ども達の心身を通して時代のひびが浮き彫りとなっている昨今。

子ども自身はもとより、子どもに関わる大人、それは保護者であり、学校の先生であり、その人達の思いや悩みをまずは聞き取り、必要であれば関係機関を紹介する。子どもセンターが課題を解決する最終地点ではありませんが、課題解決をコーディネートする要となっていたことは間違いありませんでした。

先見性あった教育相談活動

そのような時代の要請に応えた子どもセンターは、全道の教職員の支えに依拠して2000年から今日まで12年余の歴史を築いてきました。そして、現在、「電話相談」などの取り組みが様々な教育関係団体、教職員組合などで始まってきていることは、子どもセンターがすでに行っていたことの確かさにお墨付きを与えたものだと確信しています。早くても遅くても教育的に意味あることは、支える団体や立場の別を超えて大きく一致するところで共同することは自明のことであることは言うまでもありませんが、この間の「教育相談活動」の状況を鑑みても、子どもセンターが果たしてきた役割に先見性があったことを改めて感じている次第です。

先生の円満の人格と献身性が

その子どもセンターが発足してからずっと円滑に切り盛りできてきたのも、土井先生の円満な人格と献身性に支えられてきたものだと感じています。教育課題の最新情報を絶えず察知し、時々探求すべきことを常に把握され、洞察の深さがうかがえました。

05年9月に起き、1年後に全容が発覚した「滝川のいじめ事件」の重大さをいち早く感じ取り、「いじめ問題」に関しての様々な学習会を積極的に組織した先頭に立ったのも土井先生でした。その他、土井先生を中心とした「子どもセンター」が

企画した学習会では本当に多くのことを学ばせてもらいました。

土井先生の奥行き深いお人柄は趣味の多さからかとも思うときがあります。山歩きを始めとして、クラシック音楽にも精通している土井先生。ラグビーの選手でもあったとか。教育のことしかわからない私にとって、毎日更新される土井先生のブログを読むたびに土井先生の知見の広さと深さに驚いています。

真贋(しんがん)を見極める確かなもの

そして、時代を見通す視線には真理と真実に基づいて真贋を見極める確かなものがあることが、土井先生の生き方の心棒になっていることも感じていました。

子どもセンターの相談活動でどれだけ悩める子ども達や保護者、教職員が救われたでしょう。子どもセンターの企画する学習会でどれだけ多くの教育関係者が時々の教育課題を解決するヒントを得たことでしょうか。ひとえに土井先生の尽力によるものでした。

いつまでもお元気で

先日、研究会が開かれた北大で久しぶりにお会いし、短い時間でしたがお話しできました。とても元気そうでした。反原発運動等、まだまだやりたいことは山積しているとは思いますが、お体をご自愛の上活動していただきたいというのが率直なところです。

お酒の好きな土井先生。本来ならば私も札幌に出向き、酒席をもうけて色々話したいところですが、遠方なためそれかなわないのが残念でなりません。またいつかお会いでき一杯やれることを楽しみにしています。

土井先生。これまで本当にありがとうございました。いつまでもお元気で。